

稲むらの火

作) 中井常蔵 原作) ラフカディオ・ハーン

「これはただごとでない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、いままで経験したことの無い無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げにしたの村を見下ろした。村では、豊作を祝うよいの祭の支度に心をとられて、さっきの地震には一向気がつかないものようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸付けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、見る見る海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大変だ。津波がやって来るに違いない。」と五兵衛は思った。このままにしておいたら、400の命が、村もろ共一のみにやられてしまう。もう一刻も猶予は出来ない。

「よし」

と叫んで、家に向け込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛出して来た。そこには、取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んである。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ。」

と五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱっと上がった。一つ又一个つ、五兵衛は夢中で走った。こうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突立ったまま、沖の方を眺めていた。

日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなって来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。庄屋さんの家だ。」と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子供も若者の後を追うようにつけ出した。

高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みのようにもどかしく思われた。やっと20人ほどの若者が、かけ上がってきた。彼らは、すぐ目を消しにかかろうとする。五兵衛は大声にいった。

「うつちやつておけ。大変だ。村中の人に来てもらんだ。」

村中の人々は、追々集まって来た。五兵衛は後から後から上がってくる老若男女を一人一人数えた。集まって来た人々は、もえている稲むらと五兵衛の顔とを代わる代わる見くらべた。

その時、五兵衛は力一ばいの声で叫んだ。

「見ろ。やって来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の橋に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押寄せて来た。

「津波だ。」

と誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に追ったと思うと、山がのしかかって来たような重さと、百雷の一時に墜ちたようなとどろきを以て、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかった。

人々は、自分らの村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。2度3度、村の上を海は進みまた退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかった。一同は波にえぐり取られてあとかたもなくなった村をただあきれて見下ろしていた。

稲むらの火は、風にあふられてまたもえ上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。始めて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつくやうに、無言のまま五兵衛の前にひざまずいてしまった。